

# 万葉図書・情報室だより55号

## 『万葉集』を描く絵画

奈良県立万葉文化館は、『万葉集』を中心とした古代文化の研究と発信のために平成十三年（二〇〇一）九月に開館した。そのため、来年の九月をもつて開館二十周年となる。この二十年の間に多くの展覧会が開催されてきたが、そうした展覧会の多くで当館所蔵の「万葉日本画」が展示されている。まさに「万葉日本画」は当館の中核をなす収蔵品なのだが、この「万葉日本画」について解説したものはあまり多くないように思う。そこで、今回は万葉文化館の「万葉日本画」の基本について簡単にではあるが説明しておきたいと思う。

まず、「万葉日本画」の定義から説明したい。当たり前のことではあるが「万葉日本画」とは万葉文化館の所蔵する『万葉集』を題材とした日本画作品のことである。しかし、万葉文化館の所蔵する美術品の全てが「万葉日本

画」と呼ばれるわけではない。万葉文化館は開館に際して、当時の著名な画家に『万葉集』をテーマにして作品制作を依頼しており、これら初期に依頼して制作された一五四点の作品のみが「万葉日本画」と呼ばれるのである。

実際、万葉文化館には大亦観風の制作した「萬葉集書撰」などのように『万葉集』を題材とした絵画は他にもあるが、これらが「万葉日本画」と呼ばれることはない。

次に作品形式だが、「万葉日本画」はそのほとんどが額装作品となっている。ほとんどの作品が八十号（S八十号で一四五五×一四五五㎜）以上で、比較的大きな作品が多い。また、屏風形式の作品も十二点存在しており、額装作品と比べて大型の画面であるそれらは、非常に見応えのあるものとなっている。

作品に描かれているものに目を向けると、人物を大きく描いた作品は五十九点であり、残りは風景や動植物を

主題としている。風景や動植物を主題とした作品は、画家が個々にスケッチや研究を行い制作されたようであるが、人物画については、制作期間中に再現した古代衣装をモデルに着用してもらった上で合同スケッチ会を開くなどしている。これは時代考証を正確に行うことができるようにするためと、画家それぞれで服装などの描き方が大きく異なることがないようするための配慮と考えられる。ただし、その結果として、人物画には複数の作品に似たような人物が現れることがある。倉島重友〈夏野〉と鹿見喜陌〈想〉などはそうした例の一つである。風景画や動植物を主題とした「万葉日本画」には当然ながらそうしたことは起こっていないため、この合同スケッチ会が作品制作に大きな影響を及ぼしたことがうかがえる。

さて、ここまで「万葉日本画」の基本的な特徴について簡単に見てきた。先にも述べたが、来年は万葉文化館の開館二十周年であるため、「万葉日本画」を活用した展覧会もいくつか企画されている。展覧会とは一点の作品で

成り立つものではなく、複数の作品を展示することによって、個別に作品を見ていては見えない何かを見えるようにするものである。学芸員はそのような考えのもと展覧会を企画し、展示を行っている。来年の「万葉日本画」を展示した展覧会の際には、ぜひ個々の作品を見るだけでなく、複数の作品を比較しながら見ていただきたい。先程述べた「複数の絵画に描かれた同じ人物」のような、ちよつとした発見があるかもしれない。そうして「万葉日本画」を楽しんでいただくことこそ、「令和」という時代に入り、二十周年を迎えた万葉文化館にとって重要なことなのではないかと思う。

### 新着図書案内

☆聖武天皇（寺崎保広／山川出版社）  
☆古代史の思い込みに挑む（松尾光／笠間書院）

☆有職装束大全（八條忠基／平凡社）

### 利用案内

開館時間―午前十時～午後五時半  
休館日―月曜日（祝日の場合は翌平日）

年末年始（12／28～令和3年1／4）

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇

